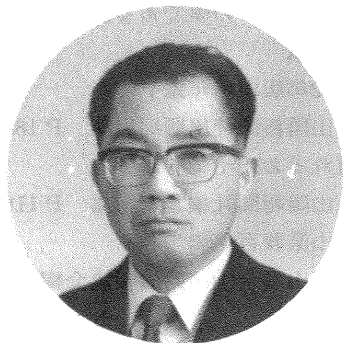


essay

## 岡山あれこれ



岡山市水道事業管理者・局長  
篠原 勇造

## ◆あゆみ◆

岡山市は岡山県の南部のほぼ中央に位置して、旭川、吉井川(いずれも国の1級河川)の河口を占め、東は京阪神に、西は広島県を隔てて北九州経済圏を控え、南に風光明媚な瀬戸内海を擁して四国の香川県を望み、北は中国山地を越えて山陰に連なっている。

岡山市域の南部は、太古には穴海といわれる海であったが、旭川などの沖積作用によって陸地化した所で、岡山の地名は、後に丘となった島の名がその起源と伝えられる。

天正元年に宇喜多直家が岡山城へ移り、城下町をつくる都市計画をたて市街を形成した。次いで小早川秀秋の治下を経て池田家の領するところとなり、31万5千石の城下町として繁栄し、明治にいたった。明治22年市制町村制施行とともに岡山市となり、その後順次隣接の町村を編入、合併によって市域を広げ、現在55万余の人口を擁するにいたっている。

## ◆市の発展と交通革命◆

岡山市の発展は、鉄道の開通がひとつの節目になっている。明治24年に山陽鉄道(現在の

山陽本線)神戸～岡山間が開通、同31年中国鉄道津山線(岡山～津山)、同43年宇野線(岡山～宇野)が開通して中・四国の要衝となり、諸産業も一段と伸長した。

山陽鉄道開通の様を「流れるおかやま百年」は次のように記している。

日の丸や、ちょうちんで祝賀色一色に塗りつぶされた町すじをぬって、岡山ステーション(当時は英語なまりでの呼び方がハイカラがられた)への人波が続く。午前6時の岡山発神戸行“一番列車”は、早朝のためそれほどでもなかったが二番列車が発車する午前9時には、ひと目みようと押しかけた人で黒山。……「ピューーツ、ピューーツ…」朝顔型のでかい煙突から黒煙をはき“陸蒸気”が発車の汽笛をひときわ高く鳴らすとこの“陸の王者”にどっと歓声がわきあがる。

「バンザーイ、バンザーイ……」

客、貨車混合の七両編成がおもむろに動き出すと、二重・三重の人がきが大きいくゆるる。

「単子長持ち質屋に入れて、のってみたいぞ陸蒸気」

開通当時の所要時間は、神戸～岡山間4時間半(実際にはかなり遅れたらしい)というから“驚異のスピード”だった。馬車で3日、蒸気船で2日かかったというのだからムリもない話。運賃は1マイル(1,609.34m)一銭と定められた。岡山から神戸まで70銭。米1升が7銭の時代だから、庶民のふところではちょっと痛い。

それから歳月は流れて昭和47年には新幹線が岡山まで開通し、大阪～岡山間の所要時間が1時間となり、また昭和50年に博多まで開通したのに引続き、今後瀬戸大橋の架橋、山陽自動車道、中国横断自動車道、新岡山空港など交通大型プロジェクトが予定されており近い将来、東瀬戸内海から山陰に及ぶ圏域における交通、流通、情報の拠点として大きく発展することが期待されている。

## ◆コレラと水道◆

明治12年、コレラが県下全域に流行し、患者9,084人、死者4,949人に達し、岡山市だけで死者3,000人といわれる悲惨な記録がある。

当時は、まだ科学的な防疫法が徹底しておらず、一般住民は薬品より「まじない」や祈祷に頼る状態であったから、防疫陣の苦心はまずそれらの迷信を打破することにあった。

また、患者やその家族は、避病院へ隔離されることを嫌い、病者の発生を隠したり、病院への収容に反抗し、警察官の説諭でやむなく収容させるという有様であった。

コレラはその後明治35年まで周期的に流行を繰り返したが、明治38年に岡山市上水道が完成してからは激減している。

岡山市の水道は、横浜・函館・長崎・大阪・東京・広島・神戸に次いで8番目の水道である。これらの都市が大都市、あるいは開港都市として著名であったのに比して、一地方

都市の岡山がこのように早く水道を持ったことは、コレラなどの伝染病の大流行がひとつの契機になってはいるが、当時の人々の進取の精神と努力の賜である。

ともあれ、岡山の水道も今年で創設77年。一段と厳しくなった社会情勢だが、よりよき岡山の水道を将来に引継がなければならないと思う今日この頃である。

## 参考文献

「1982年版山陽年鑑」

山陽新聞社出版局編集 P 188

「流れるおかやま」

山陽新聞社編集局編集 P 116・146～150

「岡山県政百年の歩み」

岡山県企画・県広報協会編集 P 27～28

中国鉄道線路下を横断する口径12インチ送水管  
布設工事（明治36年）

